

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年5月9日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 人間・環境学研究科

職 名 教 授

氏 名 奥 田 敏 広

事業区分	平成22年度・学術研究書刊行助成		
刊行書名	ワーグナーと恋する聖女たち		
著者(編著者)名	奥 田 敏 広		
発行者名	株式会社 松籟社		
発行年月日	平成23年3月31日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	直接出版費 (内訳は下記のとおり)	1,543,227円	
	収入見込額 (著者負担・売上見込)	725,700円	
	当財団からの助成額	800,000円	
	直接出版費の内訳		
	費 目	金 額 (円)	備 考
	組版代	651,400	
	製版代	144,000	
	刷版代	60,000	
	印刷代	403,000	
	用紙代	120,840	
製本代	90,500		
消費税	73,487		
合 計	1,543,227		

伝説が、それを生み出した文化にとってきわめて重要なものであることは当然であるが、近代欧米を代表する芸術家リヒャルト・ワーグナーの作品も多く伝説に基づいているのは周知の事実である。しかし一方、ワーグナーの芸術は伝説を批判的に分析し解体しようとするものだとする解釈が、現代ではどちらかと言うと主流となっている。このような傾向には、精神分析やアドルノらの批判的批評もさることながら、伝説がゲルマン精神への回帰をスローガンとするナチズムに利用された、という過去への反省が何といても大きな原因となっていることは言うまでもない。

しかし、ナチズムから時間的にも空間的にも離れた現代の日本において、そろそろそのような恐怖心を克服し、伝説と冷静に向きあうべき時が来ているのではないだろうか。近・現代芸術においても中世伝説が欠くことのできない意味をもっているのは何といても否定できないことだからである。そういう中で、ある種の統合、すなわち、伝説の単なる継承でもなければ解体でもなく、近代において伝説の何が解体され、何が受け継がれ、そして何が付け加えられたのかという変容をテーマとして論じたのが本書である。

取りあげた中世伝説は、タンホイザー伝説、ワルトブルクの歌合戦の伝説、聖人伝説としての聖エリーザベト伝説、英雄伝説としてのジークフリート伝説、ハーメルンの笛吹き男の伝説など、もっぱらワーグナーの作品と関係の深いものが中心である。しかし、本書の対象となっている近代芸術家は、もちろんワーグナーが中心にいるのは間違いないが、ワーグナーと比較してその特徴を明らかにするためにも、フランツ・リスト、ゴットフリート・ケラー、ルートヴィヒ・ティーク、ハインリヒ・ハイネ、クリスティアン・アンデルセンらの作品も取りあげ、広く欧米近代芸術一般における伝説の意味を視野に入れている。

ところで、本書の具体的な方法について特筆すべきは、文字通り百花繚乱の観のある現代のワーグナー作品の諸演出を大きく取り上げ、それを議論の中心に置いている点である。戦後のパイロイト音楽祭復興を担ったヴィーラント・ワーグナーの演出に始まり、音楽祭100周年を飾るパトリス・シェローの『ニーベルングの指環』の演出を経て、現代のワーグナー演出は、ますます大胆かつ先鋭に、かつほとんど「改作」と言えるほど斬新な実験を繰り返している。その内、本書ではカーセン、コンヴィチュニー、フリードリヒ、ヘルツ、ヴァイクル、ラングホフ、カタリーナ・ワーグナー、クプファーらの演出を主として取りあげた。

もちろん、それらは百花繚乱とは言っても、概ね伝説との関係を否定したり無視したりする傾向が強いものであるのは言うまでもない。そのような演出におけるワーグナー解釈を、本書において一方の極に置き、それらを批判的に検討・分析することを通じて本書は展開されている。それと、本書が新聞等の時評と違うのは、中世伝説から近代文学へという大きな文脈の中でドイツ文学の歴史と伝統を踏まえつつ、そしてまたそれらについての

最新の先行文学研究を踏まえて論じている点であり、そのような視点から様々の現代演出を取りあげている点である。

その結果として、ワーグナーという近代芸術家に置いて、伝説を過去の遺物として見るのではなく、その芸術創造における不可欠で根源的な源泉になっていること、しかもそれは、まさに近代のために、近代にふさわしい形と意味においてそうになっていることが、本書で明らかにされている。そしてその際大きな役割を演じているテーマが、「愛」に他ならない。英雄伝説や聖人伝説に見るように、宗教や共同体が何といても基盤となって中世伝説を基に、ワーグナーはそれらをいわば換骨奪胎させて「近代の愛」を描いたのである。

それにしても、ワーグナー芸術における「愛」は、因習や宗教から解放され、自由と光輝に満ちた官能的で肯定的な「近代の愛」であると同時に、また混乱と悲慘をもたらしがちな恐ろしくもあれば獣的ないまわしいものでもある。「近代の愛」の、もっとも純粋で至高の表現者であると同時にまた、その盲目で残酷な本質の表現者でもあるのが、近代芸術家ワーグナーなのである。この「近代の愛」に対する批判的精神の根源には、やはり素材となった伝説の存在があると言わねばならない。本書の題名にある「恋する聖女」にはこのような問題意識が孕まれている。

それにしても、「近代の愛」の一つの側面についてなら、他にも世界文学において例はいくらでも見つかるであろう。たとえば、その肯定的な側面なら、至高で理想的な愛を实践したゲーテのヴェルターがいる。また、否定的、破壊的な側面なら市民の無味乾燥な日常とロマンティックな夢の乖離から死に至るボヴァリー夫人や、妻とその愛人を殺す『クロイツェル・ソナタ』の主人公がいる。しかし、その創造的な面と破壊的な面のそれぞれについて、ワーグナーほどその多層的な形を徹底的に表現した芸術家は他にいないと言わねばならない。